都道府県別賞一等

助け合いのバトンと私

奈良県　川西町・三宅町式下中学校組合立式下中学校　三学年
今井　ミチル

今から十年ほど前、私がまだ三歳で保育園に通っていた頃、我が家は突然の大きな試練に見舞われました。

家族旅行から帰宅後、父が体調不良を訴えて近所の病院を受診しました。容態が思ったよりも悪かったため、より大きな病院へ緊急搬送されました。そこで「慢性心不全」という診断を受け、三週間の入院となりました。当時の私はあまりにも幼く、病気の意味も、事の大きさも全く理解できていなかったので、ベッドに横たわる父に大好きな人形のメルちゃんを渡して「頑張って。」としか言えませんでした。

いつも家にいる父がいない中、母は慌ただしく動き回り、私は不安な気持ちでいたことだけを鮮明に覚えています。

中学生になった今、私はあの時の出来事の恐ろしさを知ることになりました。慢性心不全は、命に関わる非常に重い病気であること。発見が遅れていたらと考えると、背筋が寒くなります。

それと同時に、お金の問題にも今なら気づけます。三週間もの入院と治療には、当然多くの医療費がかかってきます。さらに、父が働けなくなった期間の生活費等の経済的な負担は計り知れないものだったでしょう。しかし、我が家が平穏に暮らせていたのはなぜか。理由を母に聞いたところ、それは「生命保険のおかげ」だそうです。

父と母は結婚と同時にお互いの「もしも」に備えて、生命保険に加入していたそうです。父が入院した際、医療費等として入院給付金が保険から支払われました。「その保険のおかげで金銭的な負担を感じず、子どもたちも保育園に通ったり、普段通りの生活を送ることができ、治療に専念することができた。」と母が言っていました。

母からその言葉を聞いて、私は生命保険の本当の価値を理解しました。保険とは、単にお金を受け取るだけでなく、残された家族が絶望に暮れないよう心のゆとりを生み出してくれる〝お守り〟のようなものだなと感じました。生命保険は、多くの人が少しずつお金を出し合い、誰かが困った時に助け合う「相互扶助」の精神で成り立っています。十年ほど前、我が家は見知らぬ誰かが集めた〝思いやり〟の仕組みに救われました。そして今、両親が毎月払っている保険料も、またどこかの家族を救っているのかもしれません。

三歳の私は何も分かっていませんでしたが、あの時すでに生命保険という素晴らしい社会の仕組みによって守られていたのだと。

今、とても感謝しています。

現在もまだ父は薬を手放せませんが、私たちのために頑張って働いてくれています。あの時つないでもらった助け合いのバトンは私が大人になった時にも、大切な人を守るためにつなぎ続けていくつもりです。